



アレルギーフリーの洗濯技術を起点に、wash-plusが実現する近未来型のランドリー事業とは

友清 哲（ライター）

我々が社会生活を営むうえで、洗濯は日常生活から切っても切り離すことができないものだ。それでいて、洗濯に用いる洗剤や柔軟剤が引き起こすアレルギーに悩まされている人が大勢いる事実を忘れてはならない。そこで注目を集めているのが、千葉県浦安市に本社を置く株式会社wash-plusである。同社が社会実装を進める、人と地球に優しい洗濯技術とはどのようなものか？ 代表取締役社長の高梨健太郎氏に話を聞いた。

※本文中、一部敬称略
※画像提供：wash-plus



たかなし けんたろう
高梨 健太郎 氏

株式会社wash-plus
代表取締役社長

19歳で商工会議所に転職

洗剤を使わずに衣類を綺麗に洗い上げる。これはエコロジーの観点だけでなく、アトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患に悩む人々にとって、極めて重要な技術である。

洗剤に含まれる成分の一部は、免疫機能の過剰反応を引き起こす場合があるとされ、衣類やタオルの洗濯に注意を払っている人は決して少なくない。そこで株式会社wash-plusが開発に取り組み、実現させたのが、アルカリイオン電解水を洗濯に用いた完全アレルギーフリーのランドリーである。

同社の代表取締役社長を務める高梨健太郎氏は、千葉県浦安市で不動産業を営みながら、思うところあってラン

ドリー事業に着目し、新規事業に乗り出した人物だ。まずはそのキャリアを簡単に追っていかう。

「私は商業高校を出た後、一度はイベント設営の会社に就職しているのですが、これが何日も連続で徹夜を強いられるような過酷な現場で、あまり長居できる環境ではありませんでした。そこで1年ほど働いたところで転職先を探し始め、市川商工会議所に入ることになったんです」

高校時代に簿記や会計の知識を習得していたのがひとつの強み。さらに19歳という若さから、当時急速にオフィスへの導入が進んでいたパソコンにも柔軟に対応できたことから、高梨氏は次第に活躍の幅を広げていく。

「当時はパソコンを触るのが楽しくて、ほどなくWindows95が発売されると、150万円もするノートパソコンを自腹で買って、それを職場に持ち込んで仕事をしていました」

新しい物に対する旺盛な好奇心と、研究熱心な性分は、社会人として大きな武器だろう。

さらに経営指導員の資格を得てからは、高度な経営相談にも対応するようになったほか、地域の催事などに積極的にコミットし、さまざまなアイデアでイベントを盛り上げた。

もともと「ゼロから何かをつくり出すのが得意」というのが高梨氏の自己分析。知恵と工夫が求められる商工会議所の仕事は、天職だったのだろう。

「仕事でもお祭りでも、予算度外視では通じない点は同じですから、会計の知識があるのは有利なんです。その予算の範囲でやれることを考える企画力には、わりと自信がありました」

そう胸を張る高梨氏はその後、30歳まで商工会議所に勤め、今日のキャリアにつながる礎を築くことになる。

東日本大震災で発生した浦安市の液状化現象

実父が浦安市内に立ち上げた不動産会社を継ぐことになったのは、32歳の時だった。不動産業についてはまったくの門外漢であったが、これが「思いのほか面白い世界」だったと高梨氏は振り返る。

「売買や仲介から建築まで何でもや

wash+

2013年5月設立。洗剤の代わりに99.9%が水からなる洗濯専用アルカリイオン電解水「wash+ Water」を使用することによって、アトピー性皮膚炎や化学物質過敏症の人にとって安心な洗濯を提供。「人と地球にやさしい未来を」を理念に掲げ、ランドリー事業を中心とし、水資源に関わるさまざまな事業を実施している。2025年の大阪・関西万博では大阪ヘルスケアパビリオン「リボンチャレンジ」エリアに開発中の洗濯機を出展した。

る会社でした。ただ、住宅街にある不動産屋ですから、駅前の店舗のようにいちげんのお客さんがふらっと来るわけではないんです。持ち込まれるのはたいてい厄介な相談事で、権利関係が複雑な物件の処理を求められたり、売買におけるもめ事を仲裁しなければならなかったり、一筋縄ではいかない依頼ばかりでした(苦笑)』

しかしそのおかげで、不動産業のことをひと通り勉強することができたと語る高梨氏。

そして38歳になった頃、東日本大震災が発生。これが大きな転機となる。

「地震が起きた時、私は仕事で妻と一緒に都内へ出ていたのですが、尋常ではない揺れ方に驚き、すぐに千葉へ戻ることになりました。車中でニュースを追っていると、東北の津波の映像が流れてきて……。自宅や会社がある浦安市も海辺の街ですから、ひとごととは思わず、不安でいっぱいでした」

恐る恐る浦安市まで戻ってみると、思いがけない光景に高梨氏は絶句する。歩道は斜めに傾き、建物が沈んでいたからだ。

「当時は液状化といわれてもまだピンと来ませんでしたから、ただただ啞然とするしかありません。この時期、私は地元の青年会議所で専務理事を務めていたので、いったん妻を自宅で降ろしてから、あらためて市内を視察してまわったのですが、本当にこの世のものとは思えないほど、街が変わり果

てていました」

すぐに関係各所の安全確認に走り、翌朝から災害対応に追われる日々が始まった。

当時のニュース映像を覚えている人も多いだろう。浦安市では震災による死者や怪我人は確認されていないものの、街の随所で建物が斜めに傾き、路面に泥があふれていた。

そんな衝撃映像の効果なのか、浦安市でのボランティアを申し出る人は大勢いた。しかし、未曾有の事態ゆえに、人員をうまくさばくノウハウがなく、現場は混乱するばかり。それを見かねた高梨氏は、青年会議所が災害ボランティアセンターの運営を担うことを宣言し、陣頭指揮を執ることになる。

「2週間くらいたったころからは毎日1500人ものボランティアスタッフが集まってくれたのですが、その方々をいかに有効に動かすかが問題です。まずは相談窓口を我々に一本化し、市内のどこにどんな困り事があるかをつぶさに把握し、優先度の高いところから順次、100人単位で人員を送りました。どぶさらい、生活物資の配達、さらには市の下水道課からの要請で、泥で埋まったマンホールの位置確認など、ボランティアスタッフで対応できることは何でもやりました」

ここで特筆すべきは、高梨氏の段取り力と実行力だ。

浦安市は計画停電の対象エリアでもあり、目先にいくつもの障壁が立ち

だかるなか、シミュレーションを重ねて場面ごとの最適解をひねり出すことに腐心した。

「こうした段取りを考えることは、ゼロから物を作ること、さらには新たな事業を考えて実現することと、根底の部分は同じだと私は思っています」

震災で生じた空室から 新規事業のヒントを獲得

前段が長くなってしまったが、震災を含む一連のエピソードは、事業家としての高梨氏の在り方を示すうえで、不可欠なものだ。

高梨氏は言う。不動産業は地球を切り売りする、極めて安泰な仕事であると考えていたが、震災はそんな前提を一瞬で霧散させる出来事であったと。

実際、震災以降しばらく、浦安市の不動産価値は大きく目減りし、このまま不動産業を続けたところで、将来子どもに安心して引き継ぐことができるのか、疑問を感じ始めたという。

「浦安市の土地の価値は一気に3分の1まで下がり、人口も3000人ほど減りました。このまま淡々と不動産業をやってもジリ貧でしょうから、新たな事業を始めなければならないという危機感を覚えました。しかし、先立つものもありませんから、八方ふさがりです」

では、今の自分に残されたものは何か。思考を巡らせるなかでまず着想したのは、震災での経験を生かした液状

化対策事業だった。

「液状化リスクのある土地というのは、ボーリング調査のデータを集めればだいたい予想がつくんです。このデータを集めて可視化するのは災害対策として有意義ですし、不動産業との親和性も高いと感じ、すぐに動き出しました」

そこで高梨氏は急ピッチで事業計画を練り、県の助成金を申請する。しかし、採択されれば500万円の補助が受けられるはずだったが、残念ながら最終面接ではけんもほろろに却下されてしまう。

それでも、意外なところに“拾う神”が隠れていた。

「最終面接の会場の廊下に張ってあった、ある工業メーカーのポスターで、“水で油を落とす技術”が紹介されていたんです。その時は本当にそんなことが可能なのか、半信半疑に思っ

いたのですが……」

この着眼点が、後の高梨氏を救うことになる。

あえなくボーリング調査事業の計画がついた高梨氏だが、落胆する間もなく、二の矢、三の矢となる事業案を準備し、実現の可能性を探る。しかし花開いたのはそのどちらでもなく、四の矢として考えたコインランドリー事業だった。

「当時の私が持っていたものといえば、空き物件くらいでした。震災で多くの人が浦安から出て行ってしまい、自社で所有するアパートにも空室がたくさんありましたから、それらを使って何かできないかと考えた結果、コインランドリーとして活用するのがいいだろうと思いついたんです」

すぐに市場調査に着手し、国内にいくつもあるランドリーメーカーにコンタクトを取った高梨氏。しかし、大手

メーカーとの商談を続けていても、いまひとつやりがいを見いだすことができなかったという。

「コインランドリーは基本的に、メーカーから提案されるままにやるのが一般的です。物件の図面を見ながら、この洗濯機を何台、こういうレイアウトで置いてくださいと言われて、見積書を渡される。これが私にとってはすごくつまらなく感じられたのです」

もちろん、メーカー側としては事業初心者に対し、懇切丁寧なレクチャーを行ったつもりではあるのだろう。しかし、高梨氏の起業家スピリットがそれをよしとしなかった。

コインランドリーを運営するにしても、一経営者である以上、他店舗との差別化を考えたい。もし言われるままに機材を導入すれば、やがて近隣に最新機種が設置された時点で不利になるのは自明。もっと、根本的な部分で付加価値を設ける必要があった。

では、コインランドリーにおける付加価値とは何なのか。来る日も来る日も考え続けるなかで、高梨家が第1子を授かったことがさらなるヒントを呼び込んだ。

洗剤を使わず洗うという新発想

「生まれたばかりの子どもをお風呂に入れた後、寝かしつける前に保湿剤を塗ってやる必要がありました。しかし私はズボラなもので、その作業が面倒でサボっていたんです。するとある



日、それが妻にばれて烈火のごとく怒られまして……（苦笑）。『それが原因でアトピーになったらどうするのよ』と言われ、そこで初めて、アトピーが先天性のものではなく、後天的な要因で起こるものだと知ったんです」

猛省の意味を込め、あらためてアトピー性皮膚炎について調べ始めたところ、その原因となるアレルギーが、現代人の日常生活のなかに山積していることを高梨氏は知る。

「実際にアトピーに悩んでいる人話を聞いてみたところ、『洗濯をする際も洗剤なんて絶対に使えませんよ』とおっしゃるのです。だったら、彼らが使っている粉石鹼^{せっけん}を使えるコインランドリーをつくれれば、差別化につながるのではないかと考えました」

皮膚に負担がかかるとされる界面活性剤が残留しにくく、低刺激な無添加石鹼を使えば、アレルギーを持つユーザーの助けになるはず。これこそまさに求めていた付加価値だった。

ところが、いざこの妙案をメーカーにぶつけてみると、世のランドリー機器が液体洗剤にしか対応していない現実直面する。

「それなら、粉石鹼を先に水で溶かしておけばいいとも考えましたが、構造上それも難しい。何より、石鹼にはカビやすい欠点がありました。一体どうしたものかと、半ばこのアイデアを諦めかけながらも、あらためて“洗濯って何だろう？”と根本の部分をもう一

度考えてみることにしたんです」

そもそも川で洗濯をしていた大昔には、洗剤も柔軟剤も存在していなかったはず。しかし当然、それでは油污れが落ちず、衣類を綺麗にすることはできない。

そこでふと、記憶がよみがえった。ボーリング調査事業の最終審査を受けた日に目にした、“水で油を落とす”技術が存在するはずだ、と。

天啓にも似たこのインスピレーションを元に、高梨氏はすぐにそのポスターの出稿元を突き止め、直談判に向かった。

「ポスターはアルカリイオン電解水の生成装置や洗浄機を製造している千葉県内の会社のものでした。すぐに担当の方に会いに行き、その技術を洗濯に使うことが可能かどうか尋ねたのですが、前例がないようで少し戸惑っていました。だったら自分で試してみようと、その場でアルカリイオン電解水

を20リットル購入して帰ったんです」

そして広島県のランドリーメーカー、株式会社山本製作所の協力を仰いでアルカリイオン電解水を用いた洗濯実験を行ったところ、確かに油污れが落ちることを確認。この時点では最適な水素イオン濃度がどれくらいなのかは分析できなかったが、それでも大きな手応えを得た。

これにより、高梨氏の行動はさらにスピードアップする。自社物件を改装し、記念すべき第1号店「コインランドリー wash+猫実店^{ねこざね}」をオープンしたのは、2013年3月のことだった。

「洗剤不使用以外の差別化として、洗濯乾燥機を置くようにしました。当時の大手ランドリーメーカーはいずれも洗濯機と乾燥機を別々に設置するスタイルを推奨していたのですが、利用者の立場に立ってみれば、洗濯物を入れて1時間で乾燥までできるほうが絶対に便利だと思っていたからです」



アルカリイオン電解水で なぜ汚れが落ちるのか？

現在、「コインランドリー wash+」は千葉県内だけでなく、都内や神奈川、埼玉、さらには北海道まで、全国に計49店舗を数える（直営店、フランチャイズ店の合計）。これも、いかに多くの人が洗剤を使わない洗濯を求めているかの表れだろう。

ではなぜ、アルカリイオン電解水で汚れが落ちるのか。これは多くの汚れ成分が酸性の性質を持っていることに起因する。

「洗濯機の中で酸性の汚れがアルカリイオン電解水と混ざり合うと、中和反応を起こして固着力が弱まり、衣類から剥がれやすくなります。さらにアルカリイオン電解水には、油汚れを水に溶けやすい状態にする乳化作用や、^{けんか}汚れを包み込んで分散させる^{けんか}作用もあるので、洗剤に引けを取らない洗

浄力が発揮されるのです」

このアルカリイオン電解水をランドリーに実装する技術は同社独自のものであり、すでに特許も取得済み。

そしてこの洗濯法が恩恵をもたらすのは、アトピー患者や化学物質過敏症の人だけではない。2025年の稼働実績から算出された洗剤の削減量は、実に6万5447リットル。何より、そもそも洗濯物に洗剤が残ることがないためすぎる回数が少なく、排水汚染も大幅に軽減できるのだ。

通常の洗濯方式と比べて、30～68%もの節水を実現し、昨年度の節水量は後述するホテルランドリー事業と合わせて、約3354万リットルにも及ぶ。これは25mプール換算で約93杯分というから、まさにSDGs推進に大きく寄与していることになる。

なお、「コインランドリー wash+」では現在、洗濯機1台ごとにアルカリイ

オン電解水の生成機を付けるのではなく、センターで生成した水を各店舗に運ぶ手法を採っている。ここにもまた、さまざまな試行錯誤があった。

「家庭で一度の洗濯に使う水の量は、たいてい50リットル程度でしょう。しかし、アルカリイオン電解水は1リットルで2000円近くするものでしたから、1000円で洗濯から乾燥まで行うという価格設定は到底維持できません。しかし需給バランスの関係で高価なだけで、材料費は安価なので、当初は生成する機材そのものを所有して、自社でアルカリイオン電解水の生産も行うようにしました」

問題は生成に時間を要することだったが、あらかじめ店舗に500リットル用意してあれば、稼働を賄える算段が付き、洗濯機と貯蔵タンクと生成器を連動させる仕組みを導入。その後、店舗数の増加や協業先の確保など、ビジネス環境の変化に応じ、前述のセンター方式に至った。

他にも細かな障壁は枚挙にいとまがなかったが、高梨氏はその都度、固定観念にとらわれない柔軟な発想力で、それらを乗り越えてきたのである。

DXによるさらなる事業展開も

事業は「コインランドリー wash+」の展開だけにとどまらない。それというのも、1号店のオープンからわずか4カ月後に2号店を実現させた時点で、高梨氏にとってこの事業が「つま



らない」ものになっていたからだ。

「洗剤を使わないランドリーというのは話題性があって、稼働率は順調に伸びていました。でも、これではただ自動販売機を設置してまわっているのと同じで、ビジネスとしては手堅くても、経営者としてやりがいを感じる事ができなかつたんです」

このあたりは根っからのアイデアマンゆえの物足りなさだろう。その後、さらなる工夫、発展の余地を探し求めた高梨氏は、続く新店舗で2次元コードによる割引サービスを導入したのを皮切りに、メーカー側との協業で専用アプリを開発し、新たにスマートランドリー事業を展開した。

具体的には、ランドリー機器とアプリを連動させて、ユーザーが手で決済やドアロックなどの操作を行えるようにしたほか、予約機能や終了した際の通知機能など、あらゆる機能をオンラインで一元管理することで、顧客満足度の向上を図ったのだ。

「さらに、利用頻度に合わせてステータスがグレードアップするようにして、リピートを促す仕組みも設けました。コインランドリーのオーナーが最も悩んでいるのは集客戦略であるというデータもありますから、まさにそうした課題をアプリによって解消しようというわけです」

これには競合他社からの反響も大きく、すでに全国480社、約67万人のユーザーがこのアプリを利用している。



ホテル京阪ユニバーサル・タワーに設置されたwash-plusの洗濯機

また現在、wash-plusの機器は街のコインランドリーだけでなく、ホテルを中心に約70の施設に実装されている。これも高梨氏独自の着想から始まった事業だった。

「ホテルで食事をする際、アレルギーの有無を聞かれるのは普通のことですよ。だったらホテルのランドリーでアレルギーの有無を気にしないのはおかしいと感じて、大手ホテルの社長に直談判したんです」

街のコインランドリーが一体型の洗濯乾燥機メインであるのに対し、ホテルのランドリーは洗濯機単体の機種が中心であることから、細かな仕様変更は必要だったが、こちらもトントン拍子に話が進展した。

その結果、住宅街の小さな不動産業を引き継ぐところから始まった高梨氏の実業家人生は、コインランドリー事業、スマートランドリー事業、宿泊施設向けランドリー事業の3つを柱に、今なお急速な成長を見せている。その

源泉となっているのは、やはり豊かな発想力だ。

「こうしている今も、やりたいことが次々に思い付くので、体がいくつあっても足りません(笑)。実はちょうどひとつ、面白い実証実験を進めているところなんですよ」

そう言ってほくそ笑む高梨氏。すでに情報解禁されているその新規事業とは、群馬県ほか5社の協業による、水循環型洗濯機の社会実装だ。上下水道がなくても繰り返し使用できる、完全インフラフリーの洗濯機を、「wash+」の技術によって実現しようというのである。

「給排水が不要なので、船の上でも宇宙ステーションでも、どこでも使えるのがポイントです。今後、災害発生時に重宝することになると思います」

震災を機に火がついた起業家魂は、まだまだ衰えることがなさそうだ。

(ともしよ さとし)